

精神科臨床心理実習における教育目標と実習生の学び

実習記録のテキストマイニングから

Research on clinical psychology practice in hospital: by using text mining of the practical training records

古田 雅明¹, 中田 香奈子², 栗田 麻美²

¹大妻女子大学人間関係学部, ²江田記念病院

Masaaki Furuta¹, Kanako Nakada², and Aasami Kurita²

¹ Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University,

2-7-1 Karakida, Tama-city, Tokyo, 206-8540 Japan

²Eda Memorial Hospital

1-1 Azamino-minami, Aoba-ku, Yokohama-city, Kanagawa, 225-0012 Japan

キーワード：臨床心理実習，実習記録，テキスト分析

Key words : Clinical psychology practice, Practical training records, Text mining

抄録

本研究は、心理臨床家養成において重要な精神科における臨床心理実習に関する探索的研究である。2018年度より、臨床心理士養成に加えて公認心理師養成に係る実習が開始され、特に必修となっている医療分野の学外臨床実習の在り方を巡って、現在各養成校が試行錯誤の状況にある。

本稿では、従来から行われてきた比較的自由度の高い臨床心理士養成のための臨床心理実習を取り上げ、そこで実習生がどのように実習を体験しているのかを明確にすることで、今後の公認心理師養成に係る心理実践実習との統合を図る狙いで行われた。具体的には大学院を修了した5名の実習生の協力を得て、彼らの実習記録全106回分、合計143,830字（平均1,356.9字/回）をテキストマイニングによる分析対象のデータとした。KH Coderを用いた対応分析の結果、実習生の観察態度は実習を通じて一貫性があることが明らかとなった。そして、実習生によって客観的観察が優位か、あるいは関わりながらの観察が優位か、といった個別性が見出された。一方、観察対象は観察態度よりも実習生ごとに違いが認められた。つまり観察対象として臨床心理士に注目するか、他職種に注目するか、あるいは患者さんに注目し続けたり、自分自身への注目（内省）が中心となるのか、といった点である。本研究は探索段階であるので、さらにデータを増やす必要はあるが、少なくとも病院や大学院の実習指導者が、実習の教育目標を明確にするとともに、このような実習態度の個性を理解して実習指導することの重要性を考察した。

1. 問題と目的

実践力のある心理臨床家養成のために訓練生の実習体験とそれに対するスーパーヴィジョンやケースカンファレンスといった臨床指導が重要であることは論を待たない。現行の大学院養成カリキュラムは少なくとも2種類存在するが、具体的には臨床心理士養成に係る「臨床心理実習」と公認心理師養成に係る「心理実践実習」がこれに該当する。

しかしながら、そもそも心理臨床家の養成に係

る実習内容と指導方法は歴史的にも長年の懸案であり、議論や時に対立の種となってきた。心理臨床の歴史を振り返ると、精神分析などの力動学派と行動療法などの科学的エビデンスを重視する学派などの学派間においても、あるいは学派内においても、常に実習内容と指導方法といった初期教育を巡る対立があった、と言える。日本においても心理臨床家の教育制度が整う前は学派間や学派内の差は大きく、それぞれに独自の初期教育を展開してきた。

その後、心の専門家としての一定水準以上の基本的な知識と技能を有することが社会的に期待されていること、そのために教育・訓練システムの整備を図る必要があることから、1996年に日本臨床心理士資格認定協会による臨床心理士養成のために大学院教育制度がスタートした。^[1]

さらに2018年度からは国家資格である公認心理師養成も加えて心理臨床家養成は新たなスタートを切ることになった。2019年度の時点で多くの大学院は臨床心理士養成と公認心理師養成のカリキュラムを同時に展開している。臨床心理師養成のための従来からの「臨床心理実習」と、公認心理師養成のための「心理実践実習」を併行させているのだが、両実習に共通する内容とそれぞれの資格に独自の内容は何か、またそれぞれの資格に向けていかに指導していくべきか、まさに暗中模索の状態にあると言えるだろう。

次に両資格を認定する機関が公表している公文書等^{[2][3]}を参照しながら、「臨床心理実習」と「心理実践実習」について、その実習内容、実習時間、指導方法、そして指導上の留意点などを概観してみよう。

臨床心理実習

1) 実習内容

臨床心理実習では、学内外の実習施設において、実際に受理面接、心理査定、心理面接などを行うこととなっている。できるだけ多くのケースを担当させることが付言されているが、これ以上に具体的な実習内容は示されておらず、各校の方針に委ねられている。

2) 実習時間

1週1回3時間(2コマ180分)の授業15回を1単位とし、臨床心理実習は2単位となっている。すなわち、スーパーヴィジョンなどの臨床指導を90時間は実施することになる。しかし、指導対象となるケースの担当について時間数などは定められていない。

3) 指導方法と指導上の留意点

臨床心理実習の指導方法は、ケースカンファレンス、スーパーヴィジョンなどを含むものとなっている。

また臨床心理実習は複数の指導者が担当し、す

べて臨床心理士の資格を有する者であること、修士2年次に開講すること、同一の教員が2つの実習科目を担当することは避けることが推奨されている。

心理実践実習

1) 実習内容

心理実践実習では実習生が、大学段階での実習を通じて得た公認心理師に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、次の(ア)から(オ)までに掲げる事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員による指導を受けること。実習施設の分野については主要5分野(保健医療、教育、福祉、司法・犯罪、産業・労働)に関する学外施設のうち、3分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。ただし、医療機関は必須とする。また、医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む、とある。

(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得

- ① コミュニケーション
- ② 心理検査
- ③ 心理面接
- ④ 地域支援等

(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成

(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ

(エ) 多職種連携及び地域連携

(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解

2) 実習時間

心理実践実習の時間は、450時間以上とすること。また、実習において担当ケース(心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等)に関する実習時間は計270時間以上(うち、学外施設における当該実習時間は90時間以上)とすべきこと。その際、主要5分野のうち3分野以上の施設において、実習を実施することが望ましい。ただし、医療機関における実習は必須とすべきこと。なお、医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習を実施しても差し支えない。

なお、大学又は大学院に設置されている心理職を養成するための相談室における実習は、心理実践実習の時間に含めて差し支えないが、主要5分野のいずれにも含まれないこと、となっている。

3) 指導方法と指導上の留意点

心理実践実習では、実習担当教員が、実習生の実習状況について把握し、先述の(ア)から(オ)までに掲げる事項について基本的な水準の修得ができるように、実習生及び実習指導者との連絡調整を密に行う、とある。

また、次の点に留意すること。

- ・心理実習及び心理実践実習を効果的に進めるため、実習生用の「実習指導マニュアル」及び実習の振り返りや評価を行うための「実習記録ノート」等を作成し、実習の指導に活用すること。
- ・実習後においては、実習生ごとに実習内容についての達成度を評価し、必要な個別指導を行うこと。
- ・実習の達成度等の評価基準を明確にし、評価に際しては実習施設の実習指導者の評定はもとより、実習生本人の自己評価についても考慮して行うこと。

臨床心理実習と心理実践実習

以上からも分かるように、臨床心理実習はケース担当実習を中心に据えてはいるが、何時間ケース担当実習を行うべきか、また実習についてどのように指導するか、は各大学院や各教員の裁量に任されており、いわば指導者側の特色や独自性を発揮しやすい制度になっている。この点について、さまざまな学派による、経験則に基づいた個性的な教育が行われており、一定の質を担保しているか疑問であるとの批判があった^[4]。

一方、国家資格としての公認心理師は、その専門スキルをエビデンスと共に明確化するとともに、有資格者の専門スキルの質を担保することが、臨床心理士と比べると社会的により強く要請されている。この専門スキルを養成するための要となる教育が、実習であるが、さまざまな実習の中でも、とりわけ、学内実習施設ではケース担当実習が、そして学外施設では精神科を中心とする医療領域における実習が重要とされてきた^{[5][6][7]}。

この点に関し、従来の臨床心理士養成における精神科の実習では、病院ごとで実習可能な内容が

異なることに加え、大学院生の個性と大学院教員(以下、教員)の教え方の独自性によって、相当に個性が高い実習が可能であった。

一方で先に概観したように公認心理師養成に係る心理実践実習は、実習内容がかなり明確に定められているので、病院や大学院の裁量の余地が少ないと考えられる。にもかかわらず、同じ病院に対して、臨床心理士養成と公認心理師養成を並行させる実習を大学院から各病院に依頼せざるを得ず、実習生を引き受ける病院に相応の混乱を生じさせているのではないだろうか。

筆者らは、まず従来から行われてきた臨床心理実習という、比較的個別性の高い実習において何が実習生に共通の課題であり、彼らが何を共通して学んでいるかを抽出することが、心理実践実習における病院実習との異同を明確にするための基礎資料となると考えている。そして将来的に病院とりわけ、精神科領域における実習を検討する土台となりうると理解している。というのも、多くの教育機関が臨床心理士養成と公認心理師養成を同時に行っていくため、省令等で定められた実習に加え各校や各医療機関独自の養成教育の特長をも活かしつつ、マニュアル化された国家資格教育にとどまらない個別性のある心理臨床家の養成教育が求めているからである。この個別性や独自性の問題について、これまで病院独自の実習に関する事例研究^[8]や実習生へのインタビューの質的分析^[9]などが探索的に行われてきたが、従来の臨床心理士養成における病院実習の共通性と個性性を十分に描いていないとはいえない。

以上の学術的背景を鑑み、心理臨床家の初期教育を専門としてきた筆者は、心理臨床家の専門性を明確化することを試みると共に、実習生が大学院の実習を通じて何を実際に獲得してきたのかを探求してきた^{[10][11][12][13][14][15]}。

本研究はその一環として学外の臨床現場の要請と大学院教育の目標を相互に反映させることを目指し、精神科領域の実習指導者との協同による豊かな実習プログラムの構築を目的とするものである。そして、従来の臨床心理士養成で培われた精神科の臨床実習指導の知見を公認心理師養成へとスピルオーバーさせることも視野に入れているものである。

「臨床心理実習 兼 心理実践実習」の成立のためにはいかなる実習内容と指導方法の組み合わせ

が必要であるのか、それはどのようにプログラムされ、評価されるのか、を検討する基礎としたい。そのためにも、従来の個性的で独自とされてきた臨床心理実習において院生が実習プログラムからいかに学んでいるか、その実態を質的にも量的にも明らかにすることが必要であろう。

次に筆者らが臨床指導を行っている実習の概要を示し、本研究における目的を示す。

実習の概要

1) 実習内容

実習生はX病院精神科における週1回8時間の実習を6ヵ月行う(1人平均21.2回、一人当たりの実習時間は平均169.6時間)。実習内容は、病棟体験、作業療法、精神科デイケア、集団心理療法への参加、初診陪席、心理検査、カンファレンスへの参加などである。そして、毎回実習の終わりに病院の臨床心理士が実習の振り返り(以下レビューとする)を行っている。

2) 各実習内容における教育目標

病棟体験では、精神科治療病棟と認知症治療病棟の二つの閉鎖病棟を体験する。精神科治療病棟では、病態の重い患者と出会うことから始まり、多職種連携を間近で見て知ることができる。

認知症治療病棟では、高齢者の心理、認知症者の心理を学ぶ機会を得ることができる。各病棟平均2時間程度居続けることになるが、実習生からすると「放り込まれる」という言葉が近いかもしれない。閉鎖病棟という閉ざされた空間の中で、患者とともに居続けること、患者に関わることに体験し、セラピストとしての立ち居振る舞いについて考え学ぶことを目的としている。また、この時感じた体験が、「私らしさ」について知る機会にもなるだろう。

作業療法、精神科デイケア、集団心理療法での体験は、いずれも他職種の専門性を知り、多職種連携を学ぶことを目的としている。さらに、精神科デイケアでは社会復帰を目指す外来患者との関わりを体験することで、入院から外来までの患者の状態像を段階的に追うこともできる。そして集団心理療法では、集団力動について学べる機会となるだろう。

初診陪席では、医学的な視点に基づいた医師のアセスメントや治療方法を学ぶことを目的として

いる。

そして心理検査は、現場における実践的な心理検査の手技を身に着けることを目的としている。これには、患者本人へのフィードバック面接や主治医への結果報告も含まれる。

各カンファレンスへの参加については、病院の臨床心理士がどのように多職種と連携を図り、必要な情報を共有しているのかということを観察してもらう。

レビューでは、実習生がその日の実習体験を自由に語り、病院の臨床心理士は必要に応じて実習生の体験の明確化や焦点化を行い、患者と実習生(あるいはそれ以外)の間の力動を振り返る指導を行っている。実習生は、自分の体験を言語化する力を身に付けていくとともに、自身の内省も行うことを目指している。参考として実習生の一日のスケジュールを示す。

表1 実習生の一日のスケジュール

時間	実習内容
~08:00	実習先の病院に到着
08:00~08:20	白衣に着替えるなどの準備をする
08:30~09:15	精神科急性期治療病棟・認知症治療病棟の申し送りに参加する /精神科デイケアの申し送りに参加する
09:15~09:30	心理職の申し送りに参加する
09:30~12:00	(前期)精神科急性期治療病棟で患者さんと交流する /精神科医の初診に陪席する/作業療法に参加する (後期)認知症治療病棟で患者さんと交流する
12:00~12:30	心理所見を読む/書籍を読む/午前の記録をまとめる
12:30~13:30	昼休み
13:30~14:00	精神科急性期治療病棟で患者さんと交流する
14:00~14:30	多職種カンファレンスに参加する (医師・看護師・薬剤師・心理職・精神保健福祉士・理学療法士 作業療法士・管理栄養士・医療事務員などが参加)
14:35~16:30	(前期)認知症治療病棟の集団心理療法に参加する (後期)精神科デイケアに参加する
16:30~17:00	精神科急性期治療病棟で患者さんと交流する
17:00~17:30	1日の実習の振り返りを臨床心理士の先生と一緒にを行い、指導を受ける
~18:30	病院から帰宅
20:00~21:00	大学院に提出する実習記録を作成する

以上の教育目標のために以下の指導方法を取っている。

3) 指導方法

① 事前指導とオリエンテーション

実習希望の実習生に対し、実習指導教員が事前指導を行っている。具体的には先輩実習生が後輩に実習の概要を伝える引継ぎの場において教員が補足説明を行い、実習上のマナーなどについて説明している。

② 実習オリエンテーション

実習開始約1か月前に実習生を引率し、実習オ

リエンテーションを受けている。オリエンテーションでは、実習指導者である病院の臨床心理士が、実習内容、実習上の諸注意、施設見学等を行っている。教員も同席するとともに、実習指導内容等の共有を図っている。

③ 実習指導者による実習の振り返り

定期的な実習がスタートすると、まず実習指導者である病院の臨床心理士が毎回の実習後に30分の実習の振り返り（以下レビュー）を行う。

④ 実習記録の提出

実習生は、数日以内にA4×2枚程度の実習記録を書き実習指導教員に提出する。実習記録は、以下の4点を記述するフォーマットになっている。

- ・本日の実習から私が取り上げたいテーマ
- ・そのテーマに対する私の関わりとその結果
- ・実習を通じて疑問に思ったこと
- ・次回以降に必要なと思われる工夫

⑤ 実習指導教員によるコメント

次に、教員が実習生の実習記録にコメント（平均600字程度）を書き、次の実習日までに実習生に返却する。実習生は、このコメント入り実習記録の写しを次の実習日に病院の臨床心理士に提出する。

⑥ 実習後の指導

全日程終了後に実習生は実習全体を振り返ってまとめた実習最終レポートを提出する。また次期の実習生に対して実習概要を伝える引継ぎの会を行っており、先述の通りこれが教員による対面指導に該当する（図1）。

その他、必要があると判断した場合は、病院の臨床心理士と教員とで適宜直接連絡を取り、指導上の意見交換を行う。



図1 実習のフロー

本稿では精神科における上記の実習内容と実習指導において、実習生が何に注目したり、困難を感じたりしているのか、そして何を学んでいるのかについて探索的に検討し、その特徴を抽出する。しかしながら、一般的な質的研究よりも客観的な

視点に立ち、その共通点の抽出を試みるために実習記録のテキストマイニングを用いた分析を行う。

テキストマイニングとは、言葉や文章というテキストデータから新たな知識を発見する探索的な分析手法である。テキストマイニングによる分析方法は、分析・解釈プロセスを明示することができる利点がある。さらに、質的データを量的データに置き換えることができ、量的データについてさまざまな統計的検討が可能となる。そのため臨床心理学において、クライアントの生の声などに注目し、テキストデータから有益な情報や知識を抽出することが可能であるとされている。そこで今回は自由記述データから、その共通の特徴を探索的に明らかにするために、テキストマイニングによる分析が適切であると判断した。

2. 研究方法

1) 調査協力者：臨床心理士養成第一種指定大学院の修士課程2年生5名（全員女性）。平均年齢24.8歳($SD=4.6$)

対象となる実習がすべて終了し、単位認定も終わった実習生を対象とし、彼らが大学院を修了した後に、書面と口頭により調査協力を依頼した。そのうえで、許可を得られた調査協力者の提出済み実習記録の分析を行った。

2) 分析対象のデータ：実習記録106回分。合計143,830字（平均1,356.9字/回）を分析対象のデータとした。

3) 分析方法：KH Coder(Ver.2.Beta.32c)を用いた。分析に先立ち、機関名などの固有名詞を記号に置き換えた上で、形態素解析ソフト「茶筌」でデータを分かち書きし86,771語を抽出した。抽出語の種類は4,249語であり、内3,608語をKH Coderの分析に用いた。分析品詞は名詞、動詞など12品詞とし、分かれて欲しくない単語の「心理」と「検査」を複合語「心理検査」とするなど、38語を強制抽出語とした。

3. 結果

筆者らの実習指導の影響を検討するため、データを実習生ごとに実習前半、後半に分けて対応分析を行った（以下「」は抽出語，“”は実習記録の

ット)に基づいた、指導者側の教育目標に応じたものと言える。

一方、実習前半と後半の変化から実習上の注目点の個性が見出せる。本研究では3名(Bさん、Dさん、Eさん)が実習中、どちらかという客観的観察の姿勢を一貫させていたが、実習前半の観察対象が臨床心理士ではなく、看護師や作業療法士など他職種の仕事であったのに対し、後半は観察対象が臨床心理士の仕事へと変化していた。

また他の2名は、実習中、関わりながらの観察の姿勢を保ちつつ、1名は患者さんとの交流に注目し続け(Cさん)、もう1名は臨床心理士や医師に注目し続けるなど、観察対象をあまり変化させていなかった(Aさん)。

これら実習前半の実習記録と後半のそれとの比較から、実習生の観察態度と観察対象の特徴が見出せる。すなわち、観察態度は実習生それぞれに客観的か関わりながらの観察か、といった個別性があるものの、実習前後半で全員、実習態度の変化はなかった。

一方、観察対象は実習前後半で変化があり、個別性が認められた。すなわち、Dさん、Eさんのように客観的観察態度の傾向が高いタイプであっても前半は他職種の仕事に注目し、後半に臨床心理士の仕事(Dさん)に注目するタイプと、前半は他職種の仕事に注目し、後半になると自分自身への注目が多くなったタイプに分かれた(Eさん)。また関わりながらの観察態度の傾向が高いタイプでは、観察対象が一貫して患者さんであり、実習前後で変化しない(Cさん)。また、Y軸付近に付置されており、観察態度の偏りが少ないいわゆる関与観察のバランスが取れているタイプは、臨床心理士の仕事と患者さんの双方に注目していた(AさんとBさん)とまとめられる。このことから、指導者側には各実習プログラムにおける教育目標を明確化するとともに、実習生の個性をも考慮し、観察態度と観察対象を意識化させるような指導が求められるであろう。ただし、このように実習生の個別性を十分に考慮した指導が臨床心理実習と心理実践実習の双方に可能かどうかは、教育実践上、大きな課題となるだろう。

というのも今回取り上げた我々の実習指導に対する院生の実習記録は、臨床心理実習の枠組みで行われており、自由度が高いものであったからだ。実習記録のフォーマットも所属校なりに整えたも

のであったが、公認心理師養成に係る実習記録よりは構造化の程度が低い。そのため、実習生の個性が顕著に実習記録に現れやすかったとも考えられる。それゆえに、個性に応じた対応を考える基礎ともなりうると思うが、果たして公認心理師養成に係る実習の実習記録では実習生の個性がどれほど読み取れるか不明な点も多いだろう。

その意味で今後も継続した調査が必要であり、まずは各養成校が提携先病院との間で行われている実習の内容と指導方法を開示しあうことで相互にブラッシュアップしていく必要があるだろう。

5. まとめと今後の課題

本稿では、従来の臨床心理士養成を主眼とした精神科臨床心理実習の実習記録をテキストマイニングを用いて分析したが、今後は、公認心理師養成開始後の実習記録の分析との比較や、他院の実習も対象にして、今回抽出した共通点の妥当性を検討すると同時に、各校、各医療機関の独自性をも抽出する必要があるだろう。またサンプル数が十分とは言えないので、今後もデータの蓄積が必要である。

謝辞

本研究に協力してくださった臨床心理学専攻の修了生の皆さんに記して感謝申し上げます。日頃より精神科領域における臨床心理実習において実習指導をご担当くださっている病院関係者の皆様、実習生と交流してくださった患者様に心より御礼申し上げます。

付記

*本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(S2633)を受けて行われた。

本稿は、「古田雅明・栗田麻美・中田香奈子 大学院生の病院実習記録のテキスト分析. 日本心理学会第79回大会発表論文集, 2015, p390.」として発表されたものを加筆修正したものである。また、同大会において学術大会優秀発表賞を受賞している。

引用文献

[1] 公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会.
“指定大学院の概要”。

<http://fjcbcp.or.jp/jigyounaiyou/jigyounaiyou-2/>

(参照 2019-10-31)

[2] 公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会.
“大学院指定申請に関する参考資料” 1-11.

(参照 2019-10-31)

[3] 文部科学省・厚生労働省. “公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公認心理師となるために必要な科目の確認について” 2017.

[4] 下山晴彦. 臨床心理学の教育・訓練システムをめぐって－英国および米国の状況を参考として－. 臨床心理士報. 2000, 12, p.19-32.

[5] 伊藤直文・村瀬嘉代子・塚崎百合子他. 心理臨床実習の現状と課題－学外臨床実習に関する現状調査－. 心理臨床学研究. 2001, 19(1), p.47-59.

[6] 津川律子. 第9章 臨床心理実習2－現場研修－. 下山晴彦(編) 臨床心理実習論. 誠信書房. 2003, p.369-398.

[7] 津川律子. 第1章 臨床心理実習における精神科実習の意味. 津川律子ほか編. 臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド. 誠信書房. 2009, p.1-15.

[8] 金坂弥起. 精神科病院における臨床心理実習についての一試論. 臨床心理学, 2006, 6(5), p.645-650.

[9] 岩橋知子・友清由希子. 学外医療領域におけ

る臨床心理実習の学びについての質的研究. 福岡教育大学心理教育相談室研究. 2008, 12, p.33-40.

[10] 古田雅明・八城薫・乾吉佑. 臨床心理士の専門性に関する基礎的研究－臨床心理士・看護師・訓練生の比較－. 心理臨床学研究. 2008, 26(2), p.218-223.

[11] 古田雅明・加藤佑昌・森本麻穂. 医療領域における臨床心理実習の多面的評価方法に関する研究. 大妻女子大学人間生活文化研究. 2015, 26, p.31-36.

[12] 古田雅明・栗田麻美・林香奈子. 大学院生の病院実習記録のテキスト分析. 日本心理学会第79回大会発表論文集. 2015, p.390.

[13] 古田雅明・香月菜々子・八城薫他. 臨床心理士のキャリア形成に関する基礎研究(1)－修士生のアンケートから－. 大妻女子大学心理相談センター紀要. 10周年記念特別号. 2013, p.11-23.

[14] 古田雅明・香月菜々子・児玉成未他. 臨床心理士のキャリア形成に関する基礎研究(2)－インタビュー調査の質的検討－. 大妻女子大学心理相談センター紀要. 2015, 12, p.1-14.

[15] 古田雅明・相原京子・中田香織. 指定大学院におけるインターン面接陪席実習の試み第2報. 大妻女子大学心理相談センター紀要. 2009, 6, p.15-25.

(受付日：2019年11月7日，受理日：2019年11月19日)

古田 雅明 (ふるた まさあき)

現職：大妻女子大学人間関係学部教授

専修大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得満期退学 博士 (心理学)

専門は臨床心理学と心理臨床家の専門職論。現在は、心理臨床家の力量形成とキャリア形成プロセスの関連を研究している。

主な著書：

キャンパスライフサポートブック (共著，ミネルヴァ書房)

大妻ブックレット カウンセラーになる 心理専門職の世界 (共著，日本経済評論社)

生い立ちと業績から学ぶ精神分析入門 (共著，創元社)

心理臨床家の成長 (共著，金剛出版)